

Title	<紹介>林和比古編著『堺本枕草子本文集成』
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1988, 51, p. 67-67
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68790">https://hdl.handle.net/11094/68790</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 紹介

# 林 和比古編著『堺本枕草子本文成集』

伊 井 春 樹

古典文学の研究では、まずその読む本文を確立することが肝要で、近代文献学の進展にともない、さまざまな作品が対象に取り上げられ、今日にいたるまで大きな成果をあげてきたのは周知の通りである。しかし、作者自筆本が出現しない限りは、あくまでも転写による第二次本文にしかすぎなく、それがまた作者によって手が加えられてもしていると、原拠へさかのぼれないもどかしさを覚えずにはいられない。古典とは、所詮その時代の本文で読むしかないという割り切ってしまうばそれまでだが、しかし研究となるとそうもいかない。そういった苦勞を重ねながら、今日ほぼ復元し得た作品としては、池田亀鑑博士の膨大な量の諸本調査の結果としてまとめられた『土左日記』がある。また、不十分なながらも、『源氏物語』も定家本とか河内本まではなんとか読むことができるというのが現状である。ところで、『枕草子』にいたっては、まさに本文は混沌としているといっても過言ではなく、池田博士の雑纂本の三巻本・能因本、類纂本の前田本・堺本の二種四形態の分類によって飛躍的に発展したものの、それぞれの評価をめぐって争われ、いまだに決着がつかない。いまのところ人々の関心は三巻本と能因本とに集り、注釈書ももっぱらそれらの本文でなされるのが主流である。それに対して、堺本は雑纂本をほしのままに分類して類纂し直した本文で、杜撰な

点も多く信用しがたいという評価（楠道隆氏）により、それほど取り上げられないのが現状である。

林和比古博士は、前著『枕草子の研究』（昭和三十九年刊、右文書院）で詳細な跋文研究の後、精力的に本文研究に向かわれたようであり、前後四〇年の成果を今回『堺本枕草子本文成集』前篇・後篇二冊の二〇〇頁に近い大著としてまとめられた。堺本は三巻本系統に近く、その本文を推定する資料としての評価にしかすぎなかったのを、むしる。堺本こそ他の諸本に先行することなど、その主張を具体的にまとめたのが本書である。鎌倉時代の流布本は堺本であり、源氏物語の古注釈書にもその本文が引用されていることなどを明らかにされ、徹底して堺本の集成をはかれる。その本文の優位性についての論議をまとめる余裕はないが、博士の説は「枕草子の成立と伝本」（『講座日本文学の争点2中古編』昭和四三年刊、明治書院）に情熱をもって語られる。

本書は、本文篇・書本解題（後篇）からなり、台北大学・静嘉堂・三時知恩寺・吉田幸一・尊経閣・山本嘉将・桃園文庫・龍門文庫・河野記念館・田中重太郎・大和文華館・無窮会・多和文庫・群書類従・書陵部・京都大学・彰考館等一八本を三部に分け、すべての本文が見られるように翻刻する。即ち、一頁を一八行に組み、一本の本文を一行ずつにしていく。左右を見ていくことによって、諸本における異同がすぐさま判明する方法をとる。一段一段見ていくと、きわめて興味深く、あらためて『枕草子』の本文研究に大きな一石を投ずるものと思う。（昭和六三年二月刊、A5版、一九九四頁）

私家版、六〇、〇〇〇円 発売所 日本書房（一〇一 東京都千代田区西神田二一八―一二）

—— 大阪大学助教授 ——